

北越雪譜

二編  
夏

二八一





北越雪譜二編卷二目録

○雪類あふれは熊くまを得る

○雪中せつちゆうの葬式さうしき

○芭蕉翁たせをの遺墨いづ

○七世ななよの容貞ようてい

○亀かめの化石かせつ

○餅花もちばな

○齊さいの神祭事かみまつり

○煉羊羹れんやうかんの起立おきだち

通計十六條

○雪類あふれの難あ

○龍燈りゆうとう

○芭蕉たせを略傳りやくでん

○化石かせつ溪せき

○夜光やこうの玉たま

○齊さいの神功進かみこうしん

○天てん蘇羅そらの始原はじめ

○雪中せつちゆうの狼おおかみ

雪譜二編卷之中

目

文溪堂藏

本舖近刻

○骨董集三編二卷四編二卷

右醒齋京傳先生遺稿京山人百樹翁補訂

○和漢印章考三卷 百樹翁著

○女粧考前後六卷 全

此こゝ各ごとの上古こゝろより近古ちかこゝろに至るまづ古圖こゝろを載の古谷ふるやと引ひて説せつを  
下くだ一いつ女の風俗ふうぶくに係かりたる事ことハ包羅ほうら輯載しやくさいして餘あまり  
の昏くろまゝの婦人ふじん乙夜おつやの覺おぼれ供ます了しま蓋け茲こゝ本編ほんへん雪譜せつぷの餘あま  
帛ひ爰こゝは有あると以も姑な近刻ちかこゝろ二家にけの著目ちやくもくと奉ま伏請ふくせう  
雲願うんげんの諸賢しよけん刊かんは先まるの竈評ちゆうへい是こゝ祈いの

江戸

書賈

文溪堂

謹白

北越雪譜二編 卷二

北越 鈴木牧之 編選  
江戸 京山人百樹 増修

○雪類は熊を得

酉陽雜俎云熊膽春の首不在り夏ハ腹ハ在り秋ハ左の足ハあり冬ハ右の足ハありと云々余試ハ獵師ヨリ問フニ熊の膽ハ常ニ腹ハありテ四時同トト云リ蓋漢土の熊ハ酉陽雜俎の説の如ク也凡獵師山ヨリ入リテ第一ニ欲スル物の熊あり一熊を得モバその皮トその膽ト大小亦モ志スルコトモ大ニハ金五兩以上ヨリテモ多ク獵師の欲スル志スルコトモ熊ハ猛ク且智ありテ得ルハ易クシテ雪中の熊ハ皮も膽も常ニ倍寸由名ノ雪ハ穴居スルハ深ク掘リ獵師トモ力ト戮せてモ多ク捕ル種ト

北越雪譜二編中

一文溪堂藏

の術ある事初編ニ記セリたまシク一熊を得るとも其價子價と分り名利得薄シキ事トシテ雪中の熊ハ一人の力オテハ得事難シト云々茲ニ吾ガ住近在ニ后谷村ト云々あり此村の弥左エ門ト云々農夫老シテ双親年頃のねづひヨリ秋の冬ノ初め信州善光寺ニ奉詣させけりさてある日用ある事ニ二里ニウリノ所ニゆきたる苗守隣家の者過テ火を止メたりたまシキ軒ノ下ツリけきバ弥左エ門ガ妻二人の小兒トツリテ逃去マシ命一ツを助リケルものニ家財ハのろシモ目前の烟トありぬ弥左エ門ハ村ハ火災ありト云々走飯リシ今今朝々ノ家ハ灰トありテたゞ妻子の无責をよろろつて以夫婦心正直トシテ親亦モ孝心ある者ゆゑ人々を憐レたまシキ我ガ家ニ居るニ賞ル富農モありけるがハハ奴僕ノ業をやりても恩ハ報ル双親飯り来リテ

膝城双て人の家あに在らんハ心も安うらむとて諾寸竊ひそかに田地でんちを分わかりて  
入いりその金かねを假かりに家いえを作り親おやも飯いひを食くて住すけり草くさと刈刈鎌かまをささに買かひ  
求もとむほどありけむハ火ひの為ために貧まいくありし小家こがを焼やく隣家りんか一對いっひ  
て一言いちごんの恨うらみをいいふ守まもり交まり親おやむこと常とこよろしくささりたりかくてその年としも  
くまて翌年あつちの二月ふたつきのちちめ以も弥左門山やせざもんやまよ入いり薪たきを取とりて  
谷やは落おちる雪ゆき顔かほの雪ゆきの中なかよきハくくく思おもひ物もの有あり遥とほふこと視みて  
わ一人ひとりのちちををふうふううと死してしるるゆゆと幸さいしくく谷やよより見みて視しま  
ハ稀有けうの大おほ態たい雪ゆき顔かほよ打う殺ころしたるありけり以も雪ゆき顔かほといいふ事こと初編しつぱんも  
くまて記きするままとく山やま積つりたる雪ゆき二丈ふたさかもあまるが春はるの陽やう気き下くだより  
慈あはて自じ然ぜんに碎くだり落おちる事こと大磐石おほいすわんと轉ころしおとままの如ごとくく遇あひ  
人馬ひとまはさらあり大木おほき大石おほいしもうちおとさるさるままハ以も態たいももささううこ  
ままとくくあり跡あとささるるハよよききものものををくくけけたりと大おほく悦よろこびびははと

北越雪譜二編中

二 文溪堂藏

膝きももととううんんととおおひひくく日ひも西にし傾かむむハ明日あしたききここららんんととて人ひとの見み  
つけざらゆるよ山やま刀やいばみみく態たいを雪ゆきに埋うめめかかく心こころ小こ同どうたるる跡あとささるる  
家いえの中なかより親おやもかかりてよろよろとせ次つぎのああく皮かわを剥むつて用もち意いとあ  
してかかららいいくくハ勝かちハ常とこに倍たいて大おほききハゆゆきき弁べん当たうの面めん桶づく入いり  
ままとて持もつつりりハ人ひとありて皮かわを金かね一兩いちりやう勝かちを九兩くわう買かひ跡あとささるるハ  
ままとら守まもり十兩じゆりやうの金かねを得えて賃ちやう入いませせハ田地でんちともうけももととままとら  
屢しばしば幸さいありてわわとああ家いえもああららずずは作つくりたたていいぜんぜんハ浦うらきりて栄さかけり  
弥左門やせざもんが雪ゆき顔かほよ態たいを得えたるハ金かね一釜いっくを握にぎり得えたる孝子かうしハ比ひままと  
く年頃としごろの孝心かうしんを天てんのああれれと玉たまいいならんんと人々ひとびと賞あやししたりと友とも人ひと  
谷や鶯あう翁おきなががかかりりままと

○雪顔の難

吾われが住す塩澤しほざわハ下した組ぐみ六十八ヶ村むそくはちやくさむらの郷元かたもとままとハ郷元かたもとを與あづかり知しる家いえハ

古来の記録も残まらぬ其旧記の中今より二月廿元文五年庚申百集三月廿日曉湯沢病の枝村振切村の後の山より雪類不意や小押落ち其响百雷の如く百姓彦右五門浅右五門の両家りやうけがくまふうくくい家つがま彦右五門并小馬一足即死妻と嗣息すけつぎハ半死半生浅右五門の父子即死妻ハ梁の下小壓おさまで死ふいうらが寸以時 御領主より彦右五門息い一米五俵浅右五門妻一米五俵賜たまう事ことを記おあり妖魚沼郡ハ大郡おほおほ也 会津侯御預りの地あり元文の昔も今も御領内の人民を拾玉あはれふ事仰あぐくく尊たつむいぐくそのありがいまいを吾われが后のちも示あさんとて華の序つぎもさるせり近年ハ山家の人家と作なす小妖雪類を避さひて地を計かるゆゑその難あままもいれども山道と往來やまる時あたたまらうくまい死しまるもの間まある事あり初編はつぱんゆもいうく如ごとくいホウラの冬ふゆあり雪類ハ春はるもあり他国の人越後えちごよ来りきて山

北越雪譜二編中

三文溪堂藏

下と往來ゆきあせらハホウラあままを用心しんまぐ一他国の人ひともい死したる石塔いしがた今も所ところふありおとるくアレク

○雪中の葬式

吾が国わがくに小雪吹こゆきといふハ猛風不意まうふうふいよ起りおこて高山平原の雪と吹散ちりその風四方かたふきめらくくて寒雪えんせつ百万の箭やを飛とまる如ごとく寸隙すんげきの間まをも許ゆるさはらずいつもおまりて往來ゆきあの人ハ通身雪みづらふ射せまりて少時せうじ小半身雪こはんしゆき小埋こみまりて凍死とうしする夏なつまもいふがいごとく一いひもハ晴天せいてんもい俄たちにいつく二日ふたひも三日さんびつも雪ありゆき一いつくあまりま事あり往來ゆきあもいまらがた為ため小ことまること毎年あり毎年以時いじよ臨まりて死し亡なせらむの雪あれゆきのやむまを待まちも程ほどのあまりのゆゑゆせんくまく雪ゆきあれば犯まりて棺くわんといふ寸事すんじあり施主せしゆハいつくやうゆも志しのいつくりい他人たにん乃な困苦事くくじ見るもみきめのいつくありいれゆ雪国ゆきくにハいつくの苦状くじやうといふいつく一いつく我われ江

戸小逗留せしるる旅宿のちりきあへりふ死亡ありて葬式の日大  
嵐なる宿の主もろまふ往とて兩具きまひくまひあつ今日  
の仏いづる因果りのぞわかる嵐は値て人よ難義をかふる  
をいづるいとも極楽にいづるまづあどつづかまつく立づるを見  
て吾ら国の雪吹は比ぶまひいと安しとおもふ

○龍燈

筑紫のあぬ火といふ古哥もあまきよとむりよりその名たあま  
祐く人のある所あり持のたふさまへ春暉が西遊記はあぬ火を現  
たりと詳はあるせり其あぬ火といふ世の竜燈のたぐひあへり  
我國蒲原郡は龍瀉と云里言は湖東西一里半南北一里の湖水あり  
毎年二月の中の午の日の夜西の下刺より丑の刺頃まで水上ふ火燃るを  
里八龍瀉の万燈と云あま観る人多し余が友人にまをきしふ

北遊雪譜二編中

四 文溪堂藏

西遊記はあるしるつじのあぬ火と云ふさまあり近年湖水を北海へ  
おと新田と云ふ湖中の万燈も今人家の億燈と云ふり又我國の  
八海六巔ふつたの池あり依て山の名寺絶頂ふ八海大明神の社あり八月  
朔日を縁日と云ふのわる人多し此夜ふなむと竜燈あり其来る所を見  
る人なりと云ふを竜燈といふあかなく春夏秋あり諸国ふあるま  
諸書ふあるしるを見ふいづるあかきまを海より出づりもる  
毎年其百其制限定りある事甚奇異あり神仏供と云ふ  
普通の説ありあふ珍き竜燈の談あり少く竜燈を解き説あり  
ハ姑くあると好事家の茶活は供す

我國蝦城郡米山の麓は医王山米山寺は和同年中の創草あり  
小薬師堂あり中女を禁み此米山の腰と米山巔と云ふ越後北海の驛  
路あり此辺古跡多し余先年其古跡を尋んとて下越後ふあ

時新道村の長飯塚知義の謠一年夏の頃雪のおふ村の者どもを以て  
米少へのがらし小導師へ系詣の人山より来るたふ御鉢とふ所小屋ニツあり  
其の小屋一宿あふ是日六月十日之此御鉢とふ所(竜燈のおる夜帝  
おひまうけよしと竜燈とふ事よそ人あまりをりし小西の刺とちり頂ぐ  
そおまきりあまりふ大ある手鞠の如く小ある雞卵の如く大小も此御  
鉢とふありをささふと飛行もたあるひあやうあるひあやうそのさぬ  
心あり遊ぶが如く其光り螢火の色ふ似たりつあくも光りあくもひるあり  
无拜ひめぐりてあまぐくもあまぐくあまぐくあまぐくあまぐくあまぐく  
の入りと閑人ひをまりて観るもあまぐくあまぐくあまぐくあまぐくあまぐく  
ニツ小屋の更七八間さきふまきりしをかきかひりふすじとまが形ち鳥の  
やう見え光り咽の下より放つやうあり接近くあまぐくあまぐくあまぐく  
視るけんとおひひふわめくハあまぐくあまぐくあまぐくあまぐくあまぐく  
中

北越雪譜二編中

五 文溪堂藏

小一宿の心得多まが心用のあふ筒をも持せし手た是の上手あまぐく  
若あありが光り目的よこんとまをた人ありてやままとおくあああ  
たいや此竜燈ハ竜神より薬師如来さけああり罰ありうと吐りる  
声小竜燈ハおどろきまきりやうとてなる遠く飛せしと知義語まき

○芭蕉翁が遺墨

おろそ越後の雪とよこころ哥あまぐくあまぐくあまぐくあまぐくあまぐく  
よこころいままもああり 西行が山家集傾阿が草菴集も越後の  
雪の哥ああり女韻僧も越地の雪ハあまぐくあまぐくあまぐくあまぐく  
降雪小谷の傍らつられて梢を冬の山路ありらほらわらわら実小越後  
の雪の真景あまぐくあまぐくあまぐくあまぐくあまぐくあまぐくあまぐく  
りし哥人の居あまぐくあまぐくあまぐくあまぐくあまぐくあまぐくあまぐく  
さくべとも誰く越人園の戸も降らつらるる雪の夕暮又あまぐく

ふつらつとある道絶て雪小隣のちるき山里 此君ハ御名々の  
 き哥仙せんあておそりまもるも名かるめごとき御哥もありて人の  
 口碑くひもつてふ雪の實境じつきやうをよそとていハ志ろりめきて御国みくにも深雪  
 ありといぬり芭蕉翁が奥おく小行脚あきぎやうのころとて越後小入り新渡あらいあて  
 海うみ降る雨や恋こひきくらき身宿みやど寺泊てらどまりあて 荒海あらいや佐渡さだ  
 横よこふ天の川あまのがはとて夏秋の遊杖あそびぢやうあて越後の雪と見ざる事必かならせり  
 きたりば近來も越地小遊こゝろふ文人墨客ぶんじんぼくあまうとあそとと秋のまもるふい  
 ととハ雪をとおそりて故郷ふるさと逃飯にげいるゆゑ越雪の詩哥うたもあつく紀行きぎやう  
 とある稀まれハ他国の人越後えちごハ雪中ゆきなかまもるも文雅ぶんがあまハ筆あのと  
 寸事すんじあり吾が国三条の人崑崙山人北越奇談きだんを出板しゅつばんせり六巻松  
文化ハ一辞半言いちじはんげんも雪の事をあつとて今文運盛いんげんあし新板湧わりご  
年板とくちあそども日本第一の大雪ある越後の雪と記しるしる書しよ



芭蕉翁訪凍雲圖



凍雲を  
たの物々  
菓摘平  
いつ通り  
志と  
料枕  
大五成



あーのるよるが不学とも忘りて越雪の奇状奇蹟を記し  
 後来よ示し且越地小係り事ハ姑く載て好事の語柄と守  
 さて元禄の頃高田の御城下小細井昌庵といひ醫師ありけり  
 一青庵といひ俳諧を善して号と凍雲といひひとせをせぬ翁  
 奥羽あんぎやのつら凍雲となつて菜欄よつまこの花を草枕と  
 発句志げも凍雲とありあらず萩のすまを巻あぐる月月此時の  
 をせぬが肉筆二枚ありて一枚ハ唇損と覚しく淡墨をとりて一捺乃  
 痕あり二枚とも昌庵主の家ふつとを后小本唇ハ同所の親族  
 三崎屋吉兵衛の家あつと唇損のハ同所五智如来の寺ふのともあり  
 るふ文政のころ女地の邦君風雅とこのと玉ひのるかこの二枚持主よ  
 りて奉りけり吉兵衛ハ常信の三幅對よ白銀五枚りの寺一もあつき賜あ  
 りて今二枚とも御藏ともありぬと友人葵亭公羽がわのがりしつ

葵亭ハ翁ハ蒲原郡加茂明神の修驗宮本院名ハ義方吐醋と号し  
又無方齋と別号を隱居して葵亭といふ和漢の博識北越の聞人  
あり芭蕉の件の句むのふ見えざるもいふるせり

百樹曰芭蕉居士ハ寛永廿年伊賀の上野藤堂新七郎殿の

藩に生る次男寛文六年歳廿四にして仕絆を辞し京ふして季吟

翁の門に入り春を北向雲竹よ学ふとて宗房といひ季吟翁の

句集のものをも宗房とあり延宝のすえとて江戸ふ来り杉風が

家小寄小田原町鯉屋 藤左エ門剃髪して素宣といひ桃青ハ后の名あり

芭蕉とハ草庵小芭蕉を植ゆ名人よりいひる名の後ハ自号

あり翁の作小芭蕉と移辞といふ文ありその終りの辞ハたまく

花さくも花ゆるあらず莖太けきとも芥ふあらずかの山中不材の

類木むたぐてその性より僧懷素ハ是小筆を走らし張横渠と

北越雪譜二編中

八 文溪堂藏

新葉を見て修学しゆがくの力とせしとあり予その二ツをとらすたがあし陰よ

遊いて風雨小破やぶも易きを愛あむをせぬ野分のづかして鹽しほ小雨こりゅうをきき夜

引ひ芭蕉庵の旧蹟ハ深川清澄町万年橋の南詰小対むかひひる

今いま或侯あるこうの庭中ていぢゆう小在り古池の趾すぢ今いま小存ぞんせりとも余芭蕉年表一名

のそを作つくせり各肆しち刺さとともども考証未定ゆゑは刺さとやう翁身を世外小置て四方小雲水一江戸

小趾すぢをとめず終つひわ元禄七年甲戌十月十二日旅小病て夢枯

塾しゆくをかけ廻まわるの一句をのりて浪花の花屋はなやが旅りょ凶きゆう小客死きやくしせり

是こゝ攀ま世よの知る処ところあり翁が臨終りんぢゆうの事ハ江州粟津あしづの義仲寺

小このところの榎本えのきもと其角そのかくが芭蕉終おほ馬ま記き小目前こまへ視みるが如ごとくふ記きせり

此記こゝを視みる小翁こおんのところの菌毒きんどく小ありて痢りとあり九月晦くわんげつ日あり

病やま臥ふ僅わずかよ十二日ありて下泉げせんせり此時こゝ病床びやうぶぢやうの下したありし門人

○木節もくせつ翁おん小葉こはをあくる○去来きょらい○推然おほ○心秀しんしゆ○之道のちのぢ○支考しこう○香舟かうしゆ

○丈草。乙州。加香以上十人あり其角ハ以時和泉の淡の輪と  
りふ所ふあり〜が翁大坂やまきりて病ともまきりて十日ふ来り  
十二日の臨終ふ遇了奇遇といふ〜  
文中以上終馬記を摘要す義仲寺あり〜て葬礼義  
信を及〜京大坂大津膳所の連衆彼官従者までも以翁の情と  
慕へるまきり招ざるふ馳来る者三百余人あり淨衣その外智月と  
百樹云大津の米屋乙州が妻縫たてて著せまぬら守又曰三千餘  
人の門葉邊遠い〜ふ合信まきり因と縁との不可思議い〜も  
勘破まきり百樹あり〜孔子は三千の門人ありて門ふ十  
哲をい〜す芭蕉は二千の門葉ありて庵ふ十哲とよふ門人あり  
至善の大道と遊藝の小技と尊卑の雲泥ハ論まおよ〜も  
とも孔子七十や〜て魯国の城北泗上ふ葬て心喪と服まきり弟

北越雪譜二編中

九 文溪堂藏

子三千人芭蕉五十二や〜て粟津の義仲寺ふ葬る時招ざる  
ふ来る者三百餘人是以人ふ師〜るの徳あり〜をとおの〜  
蓋芭蕉の盆石が孔夫子の泰山ふ似〜るをい〜あり芭蕉曾駟  
の風輕薄の習少〜もあ〜り〜吟咏文章あ〜もあ〜る其翁の  
其角が〜い〜と〜く人の推慕まきり事今ふ於も不可思議の奇人  
あり〜れ〜が〜句〜一章と〜ども人〜を〜成句碑ふ作りて不朽ふ傳ふ  
る事今猶句碑のあら〜る国あり吟海の幸祥詞林の福禎文  
藻ふ於て以人の右ふ出る者あり〜さ〜い〜本文ふも〜るま〜り〜  
ふ〜い〜も〜て〜る菜欄の一句の墨痕も百四十余年の后ふ〜り〜  
文政の頃白銀の光りをと〜ま〜つ〜る〜論外不思議とい〜  
蜀山先生嘗謂予曰凡文墨と〜り〜せふ遊ぶ者画ハ論せず死後  
ふ〜り〜一字一百錢ふ当ら〜る〜身と〜あ〜る〜文雅幸福足〜と〜い〜

まきて歎先生の今其幸福あり一字一百銭小当らる事嗟乎難れ  
○まきまて芭蕉が行状小傳ハ諸君小散見して普く人の知る  
所ありまてまてとも翁の容見ハ舉世知る人ありまてまてまて  
一証を得るゆゑ歎雪譜ハ記載して后来小示まてまてまて  
世小埋宛せん事のまてまてまてまてまて雪小摺寸筆の老婆心  
あり。まてまて二代目市川團十郎初代段十郎の排号と嗣で  
才牛とのまてまて相違とあらたまてまてまてまて  
。寛保を盛小歴るる名人あり妻をおまてまてまてまて  
夫婦とも小俳諧と能く文雅を好り歎相違が日記のやう小  
残したる老の樂といふ随筆あり二百四十五帝の自筆あり 嘗相外シキ#一まてまてまて  
を狂奇坐真顔翁珍唇まてまてまて望望してかの家より借りたる時  
余も亡兄ととも小説一ことありまてまてまてまてまて居土用やまてまて

北越雪譜二編

十 文溪堂藏

うら相違一蝶が引船の絵の小屏風と風入とまてまての旁あて人  
まてまてまてまてまてまてまてまてまてまてまてまて  
を記したる文小我も幼年の頃まてまてまて吉原を見たる時思  
羽二重ハ三升の紋つけもまてまてまて細を着て右の手を二蝶まてまて  
まてまてまて其角まてまてまて日本想を往し事今小忘ずまてまて  
いせ小名をまてまてまてまてまて今ハまてまて人あり我ハ幸小世小ありて名  
もまてまて頗る聞えまてまて 中畧 今日小川破笠老まてまてまてまての  
まてまてまてまてまてまてまてまてまてまてまてまてまてまて  
く小兵あり常小茶のつむぎの羽織をまてまてまて嵐雪ハ其角が所  
ついでまてまてまてまてまてまてまてまてまてまてまて  
を今目前小見るが如く 翁の門人推然が作とてまてまての肖像ありハ画幅  
の肖像世ハ流傳まてまてまてまてまてまてまてまてまて  
小川破笠俗称平助壯年の頃放蕩あて嵐雪と俱小 俗称服部  
彦兵衛

其角が堀江町の居小食客たり一事件の老の樂又破笠が  
自記トキやも見也破笠一トキ小笠翁トキまゝ印觀子イんくわんし夢中庵むちゆうあん等の号あり  
絵ゑを一蝶ひとてふ小学まなこび俳諧ハ其角を師とて余が藏する画幅小延享  
三年丙寅仲春夢中庵笠翁八十有四華とあり描金を善して  
人の相すがたをなめず別小一趣ひとしほの奇工きこうを為す破笠細工とて今小賞  
せらる吉原の七月創つくて機燈きとうとうと作りて今小其余波よたを残り傳詳  
まゝとてこのとてわらせり

○化石溪

東游記とうゆうきよ越前国大野領の山中小化石溪あり何物中ても半月あ  
るいハ一ヶ月以溪小浸ひたしおけがなめず石小化いしお寸器物すんぎぶついさらあり紙  
一東藁とうぼう中てもむとびらるる石小化いしおとて見るととるせり我が越後中も  
化石溪あり魚沼郡小笠の在羽川とら溪水せきみづへ蚕まゆの腐くさたると流ながる

北越雪譜二編中

十一 文溪堂藏

一夜おして石小化いしおしたると友人葵亭翁きやうていおうがからまきかの大野領の  
化石溪ハ東游記の為小名高なかつたかけとて我う国の化石溪ハせよとら  
れが又近江の石亭いしどうが雲根志变化うんねんしへんがの部小編人あり語云越後國  
大飯郡小寒水滴おほいそりといふあり此処深山幽谷しんざんゆうこくあり互寒たがひさむの地ちを  
了此滝坪たきひらへ万物を投なごめおろふ百日を過すして石小化いしおすとて  
滝坪の近所たきひらのちかで諸木の枝葉又ハ木の實みその外生類げいじゆうるいもて石  
小化いしおとて得るととて予去る頃女滝の石を取とりせ一人ありて見る  
は常の石小ありじょうのいしおび全鉢鐘乳ぜんぱつしゆくあり木の葉を石中いしちゆうにおくは則石  
あり雲林石譜うんりんせきふの鐘乳しゆくの轉化てんがして石小ありいしおなりん云收之案  
る小越後小大飯郡おほいそりあり又寒水滴さむいすのたみの名もきさす人あり語るとあ  
る傳聞でんわんの誤あやまちありわが蓋北越奇談がいはくきだん小会津小隣あひづのりる駒こまが岳たけの深谷ふかや  
小入ると三里あり化石溪いしおと名付る処あり虫羽草木むつうさくといふとも

溪たに不入いりて一年と歷ひむるも化石くわしせきして石いしとある其川そのがわ甚く苦寒くわんなりて  
 夏なつも涉わたるる如ごとく又また蕪うる門もん岳がくの北きた下した田た郷がうの深ふか谷やうも化石くわしせき  
 あい云いく雲根志うんねしの説せつはこれらの所ところを聞き誤ごするものらん

○亀の化石

吾われが同郡岡どうぐんこうの町まちの旧家村山藤左工門きゅうじやまふさとうざくもんに余よが壻むすめの兄あにあり此家このやは  
 先代せんだいより秘藏ひさうする亀の化石くわしせきあり傳つたへたる近ちかき山間さんかんの土中つちなかより  
 掘得くわくたる実じつ化石くわしせきの奇き只ただあり茲こゝ小図せうずを挙あげて弄ろう石家いしやの釜かまを俟まち  
 百樹ひゃくじゆ曰い件の圖ずを視みる小常せうじょうありある亀かめと六む形状けいじやう少すく異いなる  
 あり依よて案あんする小本草せうほんそうは所謂すゐい秦龜しんき一名ひと筮龜せのきありいハ山龜さんかめと  
 い俗いは石龜いしがめといふ物ものありあはる秦龜しんきハ山中やまなかに居をるものありゆゑ  
 呼よんで山龜さんかめといふ春夏しゆんげハ溪水けいすゐに遊あそび秋冬あきふゆハ山やまに藏かくる極きまて長壽ちやうじゆ  
 する亀かめハ是こゝありとて又また筮龜せのきと一名ひとするハ周易しよくぎに亀かめを燒やけて占うひ

雪譜二編卷之中

五

文溪堂藏

甲之図



鱗之化石



腹之図



堅かた 曲尺まがぢ五寸五分  
 横よこ 四寸五分 厚あつ 二寸六分  
 重おも 八百目

腹之図





雪譜二編卷之中

十三

文溪堂藏

一の以亀ありとぞ件の亀の化石本草家の鑑定を得て秦  
 亀あり一層の玃を増ア山あて握得とるとあるは秦亀不  
 ちきやうあり化石といふものあまゝ見しふ多し小きものぞ  
 あついまも体全も稀あり図の化石ハ体全く且大あり玃  
 とすぐ。余先年俗ふいふ大和めぐりまゝるをり半月あ  
 まり京にあつて旧友の画家春琴子小就て諸名家をたづ  
 ねし時鴻儒の聞高き頼先生名襄字子成山陽も訪ひ坐談化  
 石の事おほい先生余は蟹の化石一枚と恵その色枯すし  
 て生が如く堅硬ことハ石あり潜確類各又本草三才図会等  
 ふとる石蟹泥沙と俱は化して石ありとあるは一かんやう盆春  
 あり石菖の下あつて水中不動が如く亀の徒者ハ其図と  
 出す是も今ハ名家の形見とありぬ



○夜光玉

雲根志<sup>うんえん</sup>靈異の部小曰<sup>よ</sup>予が隣家<sup>とま</sup>不<sup>ま</sup>壯勇<sup>まうゆう</sup>の者あり儀兵衛といふ  
或時<sup>あるとき</sup>田上<sup>たかじま</sup>谷といふ山中<sup>やま</sup>小行<sup>こぎ</sup>て夜更<sup>よあけ</sup>て飯<sup>い</sup>るふむらうある山の<sup>やま</sup>間<sup>ま</sup>  
底<sup>そこ</sup>より青く光り虹<sup>にがひ</sup>の如く昇<sup>のぼ</sup>てまゑん天<sup>あま</sup>不<sup>ま</sup>接<sup>まひ</sup>る坎男<sup>あうなん</sup>勇漢<sup>ゆうかん</sup>あれ  
無<sup>な</sup>二<sup>に</sup>元<sup>げん</sup>三<sup>さん</sup>小草木<sup>こくさうぼく</sup>を分けて山と越<sup>こ</sup>谷をけりてかの根元<sup>ねげん</sup>をさぐりける  
ふたが何<sup>なに</sup>の異<sup>こと</sup>なる事<sup>こと</sup>もあきし石ありひろひとりて背<sup>せ</sup>ふ負<sup>か</sup>ひ飯<sup>い</sup>る小道<sup>せうだう</sup>  
止<sup>と</sup>まら光<sup>ひかり</sup>るものと前の如<sup>ごと</sup>く其<sup>その</sup>ごと夜道<sup>よみち</sup>の勞<sup>らう</sup>をたすりり曉<sup>あけ</sup>の頃<sup>ころ</sup>我<sup>われ</sup>が  
家<sup>いへ</sup>不<sup>ま</sup>着<sup>ち</sup>ぬ件<sup>けん</sup>の石<sup>いし</sup>を軒<sup>のき</sup>の外<sup>そと</sup>不<sup>ま</sup>直<sup>ちか</sup>し置<sup>お</sup>朝飯<sup>あさい</sup>をたすりて彼の石<sup>いし</sup>を見  
んとすりり石<sup>いし</sup>ありいり不<sup>ま</sup>せし事<sup>こと</sup>やらんとさぬふたづみりむれども  
行<sup>い</sup>方<sup>かた</sup>をますすとあん又<sup>また</sup>本<sup>ほん</sup>国<sup>こく</sup>甲賀<sup>かへ</sup>郡<sup>ぐん</sup>石原<sup>いしはら</sup>潮音<sup>しうおん</sup>寺<sup>てら</sup>和尙<sup>わじやう</sup>のものをぐり  
り近<sup>ちか</sup>里<sup>り</sup>の農人<sup>のうじん</sup>畑<sup>はたけ</sup>を掘<sup>ほ</sup>居<sup>ゐ</sup>る不<sup>ま</sup>拳<sup>こぶし</sup>をたふる石<sup>いし</sup>をりりいりせり坎<sup>かん</sup>石<sup>いし</sup>常<sup>じやう</sup>の  
石<sup>いし</sup>よりハ甚<sup>お</sup>ごうらうらうとて取りかたりぬ夜<sup>よ</sup>不<sup>ま</sup>入<sup>い</sup>りて光<sup>ひかり</sup>ること流星<sup>りうせい</sup>の

雲譜二編卷之中

文溪堂藏

如<sup>ごと</sup>く友<sup>とも</sup>のいふ是<sup>こゝ</sup>ハ靈石<sup>れいせき</sup>あり人の持<sup>も</sup>ちのふあらず家<sup>いへ</sup>不<sup>ま</sup>あはむ必<sup>かならず</sup>災<sup>わざい</sup>あり  
一<sup>ひと</sup>をやくむやうてまづアアと音をきいて斧<sup>きね</sup>とちりて打<sup>うち</sup>碎<sup>くだ</sup>しと竹<sup>たけ</sup>  
やぶの中<sup>なか</sup>にきてりり其<sup>その</sup>夜<sup>よ</sup>竹林<sup>しんりん</sup>一面<sup>いっぺん</sup>不<sup>ま</sup>光<sup>ひかり</sup>る事<sup>こと</sup>数万<sup>そむばん</sup>の螢火<sup>えいひ</sup>の如<sup>ごと</sup>く一<sup>ひと</sup>翌<sup>あした</sup>  
朝<sup>あす</sup>近<sup>ちか</sup>里<sup>り</sup>の人<sup>ひと</sup>まきつて集<sup>あつ</sup>まり来<sup>き</sup>り竹林<sup>しんりん</sup>をたづみりるふサ一のくづ  
までも一<sup>ひと</sup>石<sup>いし</sup>も有<sup>あ</sup>る事<sup>こと</sup>あり又<sup>また</sup>筑<sup>つく</sup>后<sup>ご</sup>国<sup>こく</sup>上<sup>じやう</sup>妻<sup>さい</sup>郡<sup>ぐん</sup>の人<sup>ひと</sup>用<sup>もち</sup>ありて夜<sup>よ</sup>中<sup>ちゆう</sup>近<sup>ちか</sup>  
村<sup>むら</sup>一行<sup>いっぺん</sup>よりの小川<sup>せうがわ</sup>ありかちりりせしふあふやらん光<sup>ひかり</sup>る物<sup>もの</sup>あり拾<sup>ひろ</sup>ひ  
とりてまじりバ小石<sup>せうせき</sup>あり翌<sup>あした</sup>日<sup>ひ</sup>さる方<sup>かた</sup>へ献<sup>けん</sup>ずとまじりくし失<sup>あ</sup>たりとを  
一条<sup>いっせう</sup> 是<sup>こゝ</sup>等<sup>とら</sup>ハ他<sup>た</sup>国<sup>こく</sup>の事<sup>こと</sup>あり我<sup>われ</sup>が越<sup>こ</sup>后<sup>ご</sup>も夜光<sup>よかう</sup>の玉<sup>たま</sup>のありし事<sup>こと</sup>あり  
全<sup>ぜん</sup>支<sup>し</sup> 新<sup>しん</sup>発<sup>はつ</sup>田<sup>でん</sup>より 浦<sup>うら</sup>原<sup>げん</sup> 東<sup>とう</sup>北<sup>ほく</sup>加<sup>か</sup>治<sup>ち</sup>といふ所<sup>ところ</sup>と中<sup>ちゆう</sup>条<sup>じやう</sup>といふ所<sup>ところ</sup>の間<sup>ま</sup>路<sup>ぢ</sup>の傍<sup>わら</sup>田<sup>でん</sup>  
の中<sup>なか</sup>に庚<sup>かう</sup>申<sup>しん</sup>塚<sup>づか</sup>あり坎<sup>かん</sup>塚<sup>づか</sup>の上<sup>うへ</sup>不<sup>ま</sup>大<sup>だい</sup>さ一<sup>いち</sup>尺<sup>じやく</sup>五<sup>ご</sup>寸<sup>すん</sup>たりりの凹<sup>あな</sup>石<sup>いし</sup>と鎮<sup>ちん</sup>し  
てられを和<sup>わ</sup>る坎<sup>かん</sup>石<sup>いし</sup>との先<sup>せん</sup>農<sup>のう</sup>夫<sup>ふう</sup>屋<sup>やく</sup>の后<sup>ご</sup>の竹<sup>たけ</sup>林<sup>りん</sup>を掃<sup>さ</sup>除<sup>じゆ</sup>して竹<sup>たけ</sup>の根<sup>ね</sup>  
を掘<sup>ほ</sup>るとてかの石<sup>いし</sup>一<sup>ひと</sup>つを掘<sup>ほ</sup>得<sup>え</sup>りりその色<sup>いろ</sup>青<sup>あお</sup>とありて黒<sup>くろ</sup>く甚<sup>お</sup>ごと

あめららるるあり農夫らまをゆつて藁をさうつ盤とあす其夜妻庭ふ  
しし燦然として光る物あり妻妖怪ありとして驚叫家主柱夫  
三五人を伴ひ来りて光る物を打ふ石あり皆ゆつて怪と石と竹  
林ふ捨つその石夜毎ふ光りあり村人おをまて夜行ゆのあり依て  
以石を庚申塚ふ祭り上ふ泥土を塗て光をからす今猶苔むして  
あり好事の人この石を乞へども村人崇あらん夏と堪てゆきひとそ  
又駒ヶ岳の麓大湯村と行尾村の間を流るる溪川を佐奈志川と  
いひいせ湯水せり頃水中ふ一点の光あり虫の水よあがが如し  
数日処を移す守一日暴雨よ水増て光り物所を失ふ后四五町川  
下子光りある物螢火の如し地山中あまき村夫等昏愚ゆつて  
夜光の玉ある事を乞ふ敢てたぐひゆとむる者もあがりふ其秋  
の洪水よ夜光の玉ふびあがして所在を失ひいとして  
以上北越  
奇談の説

雪譜二編卷之中

五

文溪堂藏

茲小夜光珠の实事あり我文政二年卯の春下越後と歴遊せし  
とり三嶋郡ふ入り伊弉彦明神と拜旧知識あまき高橋光則と尋  
しふ公羽大ふよりいひて一宿を許しぬ公羽和哥を善し且好古の  
癖ありて卓達の人あり雅談湧が如くおゆり守節をめぐり事四五  
日あり一夕翁の語りたるい今より四五十年以前吉田の  
ちり大島川といふ溪川ふ夜おく光りものありとして人怖て近づく  
ものぬりふ小坂川の近所ふ富長村といふありあまき鍛冶の兄弟  
ありいこの母と養ふ家最貧し其兄弟剛気あるものゆゑか光  
り物を見きらめゆ妖怪ありて退治して村のものどもが肝とむ  
しんとてある夜兄弟かこふゆりふをりも秋の頃水もま  
さり川面をこもふ月暗くしてたぐ水の音ときくのと二人炬  
をかりてゆつてこもふ光るものちらあゆくまて怪しむ

とぞすさきて人のいひに空言あはれんいざとて飯らんとまじりて水の上  
俄カウに光明クワウキウと放つまをよとて兩人衣服を脱めぎして水に飛入り泳やぎよ  
了りして光る物を探りしるまをくくり枕まくらをもちる石ありまをきを取とりて  
家いへに飯りまづ灶かまどの下に置おき一室を照てらせりまづぐのよ  
母ははがくりけまに不思議ふしぎの室を得えるとして親子よろこび近隣きんりんよりも来  
りしるまありしるまのまらぬ者ともあまし趙璧てうへき随珠ずいしゆともおもをま  
うち過すりかくて后弟別家こうていべつけする時家の物ニツふちて弟あにふとんや  
母のいひし弟の家財けざいを望のぞみて光る石を持去んとし兄あにがくく光る  
石いしを拾ひろひ得えし我が企くみあり汝あたが我が力ちからと助たすけしあり光る石は親  
の譲ゆづりあらず兄が物あり家財けざいを分わかるといおやのまづりしるま  
へけまとふまじりし弟あにのいひくあのお石いしはおまづりありいんまをれ  
いけん身みに光る石いしを拾ひろんと企くみありあらず妖物あやものと退治たいぢせんし川かの

雪譜二編卷之中

其 文溪堂藏

たりけん身みより我先せんよ川かへ飛とりり光りわのまを採とりあててかづき  
あげし我われありまをまねおれむらひに持もたらんふあふあらんわ  
く弟あに兄あにがものまう弟あにがのまうと口論くわんろんやまをて終はつとあひまら  
ひしと母ははやうくまねしまづあまらるる光る石いしをニツふ破やぶりて分わつと  
いし弟あにさうらびとて明玉めいぎよくをまうりしるま銀冶ぎんぢする鑽くわんの上うへのせ鏡かがみをもち  
力ちからあまうせて打うちまをいまむびて明玉めいぎよく碎破さいは肉にくふ白玉はくぎよくを身みにまも  
碎くだけ水みづありて四方あほうへ飛散とびちる其夜水そのよるみづのころし一処いこ光り暉あやく事こと堂どうの群ぐん  
らまが如ごとくまうしふ二三夜にさんよやしてその光りも消きえしけりしとぞいふ頑愚がんぐの  
手てふありしといひあまら稀世きせいの宝玉ほうぎよく鄙人ひじんの一植いつちをうけて亡なはる  
玉たまも人も俱ともふ不幸ふこうとふとて語かたらまをて牧まき之の案あんま橘たちばな春暉はるあけが著ある  
北きた窗まど瑣談さだんの二編にへん藏石家ざうせきけの事ことといふ條じょうふ曰い江州山田えしゅうさんでんの浦うらの木之内きのうち古  
繁ま伊勢いせの山中やまなか甚た作しやく大坂おほさかの加嶋屋源太兵衛かじまのゑんたへいゑ其外そのほかふも三都さんとの中の

好事家侯國の逸人藏石小名の高き人近年夥し余も諸家の  
奇石を見しに皆一家の藏る處三千五千種小いもの多き中お  
目を尽してやうく眼をみるを得る小いもの多き中お  
も格別小目をおどろりすむもの珍奇の物ハ无りあり加嶋屋  
源太兵衛ものぶらり小過一年北国より人ありて拳の太き乃  
夜光の玉ありよ一室を照すよき價ありい賣人といひしを  
即座小其人よ托して曰其玉求たし暗夜その玉の入りたる箱  
の内をうり白きやう小見えぬが金五十兩ふりむづり又その玉  
わく闇夜小大ある文字二字中も読えしもの金百兩ありむ  
づり又昏拭むむむと多く三百金ありよ一室をてらむる吾が  
身上のうづの力を尽して求むづり媒して玉するづり  
いひがそのもちあめの便りぬそやめぬ空言ありしと思つ

雪譜二編卷之中

文溪堂藏

云云此文段ハ天明年中藏石の世小流行たる頃加嶋屋が話を  
そのまゝ小春暉が后よたるるづりさそ又余がかの鍛冶屋  
が玉のち形をききし文政二年の春あり今より四五十年以前  
とあまぶ鍛冶が玉を碎きたるハ安永のすゑり天明のたゞめ  
あるづり狀りともいひ藏石の流行する頃あまぶかのしよやが  
話小北國の人一室にたらし玉のりものありしといひ我國の  
縮商人あまぶがむらやの玉の更をききつて高く口をひひわそ  
らむすあまぶ小玉いんききしときかまやの答むらししや  
あらん小和が玉も楚王を得るまむらそ世あもむら右あのせ  
たる夜光の話五ツあり三ツハ我が越後小ありし事よりいづも  
世あむら守嗟乎惜むづり  
百樹曰五雜組物の部小鍛冶屋がをちり小類せる更あり

明の万曆の初國中連江の所の人蛤を剖て玉を得る事  
とも不識る事をも記せる珠釜の中に在りて跳躍して定ず火  
光天小燭里人火事あくと驚き来りて救ふ玉と意  
するものゆゑと聞て金の蓋と啓て視ると已小玉ハ半枯る  
其珠徑一寸許以真ノ夜光明月の珠あり俗子ハ厄せらるる  
事悲夫と記せり又曰五雜組魏の惠王が徑寸の珠前後車  
戎照こと十二乗の物むりの事今天府も夜光珠を  
と明人謝肇淛が五雜組小つり。神異記。洞冥記も夜光  
珠の真見えども孟浪は属す古今注ありまゝとて太  
鯨の眼ハ夜光珠と為るとり下和が玉も剖之中果有玉とい  
つ石中小玉を孕たる事鍛冶り碎る玉下和が玉ハ類せる  
趙の惠王が夜光の玉を秦の惠王が城十五と以て易んといハ

雲譜二編卷之中

文溪堂藏

加鳥屋が北国の明王を身上尽し買んと約せし小類せり  
さて又癸辛雜識續集下卷小機婦糸を水ふひておき  
小夜中白く大蜘蛛蜘蛛きりてその水をとのむ身小光りを  
をわらわの婦人を見ても見て大あやしく雜龍を單てうの蜘蛛  
蛛をとりて小腹小夜光珠在たき彈丸の如しと記せり  
を前文小故之老人が引くる北越奇談玉の部ハ越後ハありし事として  
やせしその事癸辛雜識ハ少しもちがひすわのや癸辛雜識ハ唐本  
あり且又容易や得べきとき各あきば北越奇談の作者俗子の目ハ奇と  
するさんとしてたむむるは越後の事としてかきこくはあじ  
癸辛雜識續集都下も得がけ本各哉  
又増一阿含經第卅三等法品  
九 轉輪聖王の徳はるるをわらわら一尺六寸の夜光摩  
尼室ハ彼国十二由旬を照すとあり文多けまハあけす蓋一  
由旬ハ異国の四十里あり十二由旬ハ日本道六十六里あり一尺  
六寸の玉六十六里四方と照をハ奇異といふ一轉輪王此玉

と得て試よ高き幢の頭ふ率著けるよ人民等玉の光りと  
もまづ夜夜の明くるとおのひおのく家業をたどめらうと記  
せり女事碩学の聞高き了阿上人の語ふきこてかの經と借  
得て讀しよまれば夜光の玉の親玉あるべき

餅花

餅花は夜ハ鼠がよー野山一ふねやまとい其角がまじいのをすまふ

了江戸もどりの餅花ハ十二月餅搗の時もちまふお作り歳徳の神

棚たなはささるよー俳諧の季きふハ冬とす我國の餅花ハ春あり正月十

四日まがを大正月おほしげといハ十五日より廿日までを小正月こしげといハ是我

里俗の習なまじせありとて正月十三日十四日のうちふ門松かどめめざり

と取アしと拂はらひ我國長岡あつらひてハ正月七日ふかぎ餅花と作り大神

宮歳徳の神えんす夷えんすあめく餅花一枝えんすつる神棚えんすとてその作り

剛夫得名玉圖



やういづづ木やうら木あるいは川揚の枝をとりてさきふ餅と  
 三角又ハ梅梅の花形ふ切たる紙かの枝あきくあるいは團子と  
 もまじりてこれを蚕玉とてふ稻穂又ハ紙あて作りたる金銭縮あ  
 きいともまじりてちぎるのひ形形と紙あて作り農家あてハ木とけり  
 て鍬鋤のたぐひ農具と小さく作りてもちまあの枝あてのくるまぶ  
 ておのまじりて家業ふあつるものひあつて紙あてのまじりてその業  
 の福といひるの祝事ありもちまあの枝あてのまじりてその業  
 手業あり祝いとて男女とももちまあて声よく田植哥とて  
 くふ女をもまじりてきけハ夏がこいへく家のよき子雪のえやくまよ  
 かしとおもふも雪国の人情あり秋餅花ハ俳諧の古き季節寄ふ  
 もりてこれハ二百年來諸国にもあるハ勿論ありちりちり江戸ちり  
 季節より子小見の子遊小作のあきまよとまじりて



蘇の神勸進

我々塩沢近辺ちしづきみぎんの風俗は正月十五日まで七八歳より十三四までの男の童どもこどもも蘇の神勸進きんじんといふ事をまつサレ富家の童どもこどもは蘇守くそりの楠木くすのきと上下より削り掛かて鏝くろの形を作るこまこと三棒みつぼうといふこまこと二本大小をさし上下ともや一童僕こどもより一升しやうますをめてせ又いひもあつてくびあがるあつその中へ五六寸をうりの木を頭かぶにのり人形かたまり作り目鼻めばなともぶきニツつくりて女神男神より女神めがねはがし綿わたをきせ紙かみをして作りくる衣服いふくは紅べにをして梅の花うめをきあぐく男神おとこは烏帽子からかぶをきせ木とけづりうけて鬚ひげと守紙しのいふく小若松こわかしほをききあぐく松まつツツ松まつかの升しやうの内うちふおきて蘇くそりの神勸進きんじんこまとよぶりあつく敢物あそびものの欲やくあもあらす正月しやうげつあそびの二ツたのりこま二人ふたりのこまあらす見輩けんぱいのこまき事ことあつこまこまはうらるもの

雪譜二編巻之中

文溪堂藏

切餅きりもちありい錢せんもふふ又まづききのこまこまはうらるうらる五七人ごしちにん十人じうにん餘あまも童たうどもやや葛木綿くわもめんの頭づきん中ちゆうもあたまあたまののりをうらるうらるをむりかなかなの斗と棒ぼうは一本いっぽんさし一の二神ふたかみと柳やなぎより入いれまきて首くびあけ「きの神かみのかみさるん錢せんども金かねでもこつとくもあそび」といひあつてこまこまふ錢せんもあそびあるいし油あぶらり酒さけを飲のみまかせ顔かほも墨すみとあつていひいどいよあつてこれをあそびますまらうりせあり又長岡ながのがのやうであつていひの斗と棒ぼうのけづりかけの三尺さんしゃくたうりあるふ空そらづりくをききあつていひいどいて勸進きんじんまこまのい小兒こどももあらす大人おとなのいやきさうづきあり勸進きんじんのこまをふ「せもどもかむもおのりあそびらねんの春はるハ娘むすめども聲こゑどももあつていひ泉いずみのすこまらうりあつていひいすつとすつとあつていひいいかくして勸進きんじんの錢せんもあつて蘇くそりの神かみをまつ入用いりようとまらるありあ下しもも又去年こゝろむさあをむらうり家の門かどふ未明よるよりうらるうらるこま

大勢ありまゝりかの斗棒とて門戸を敲きよめをたせむとせ  
同音ありたりたるを里俗の祝事とすむべしける家あり小とも  
と入まて物をとらむるありかざる俗習他国ありあめりあり  
○さて此事たわいのあきせむものたむむことのおいひききふ  
醒斎京傳翁が骨董集を讀て本拠あり事を發明せり骨董集  
上編下粥の木の條に粥杖。祝木のわいけ棒との物前小ひ  
斗棒も同じ京傳翁の説に粥の木といふ月十五日粥と烹く薪と  
杖と子もさぬ女のまをさうては男子をさらむとの祝ひ事なり  
とて。枕の草紙。狭衣。弁内侍の日記その外なきの昏を引て  
上代の宮裏近古の市中粥杖の事と擧て考証甚詳あり今  
我が郡より斗棒ハ則ひあくの粥杖の遺風あり事を發明せり  
我國にも祝木あるひハ御祝棒といふ所もありこれ七八百年前より

雪譜二編卷之中

文溪堂藏

正月十五日よまゝる事京傳翁が引まぐる昏とてさうてありその  
引昏の中にも明人の作日本風土記もあるはゆいとも我國のあや  
似たり歟昏ハ今より三百年むりいせんの日本の風俗を明人の  
聞てて昏とてものおもて今我國より小童のたむむこと  
ろの三百年むりさきたの風俗遠境もろりのさうたるありし  
京傳翁が引る日本風土記 卷の二時令の部とあり漢文の「但街道  
郷村の児童年十五八九已上及ぶ者各柳の枝と取り皮とを  
木刀よ彫成る皮と以後外刀上小纏ひ用火焼黒め皮と  
去り以黑白の花と分つ名づけて荷花蘭蜜といふ再荆棘の  
條を取香花神前小挿供次小集る各童手小木刀と執途は  
隊前凡有婚无子の婦木刀と將て遍身打之口は荷花蘭蜜  
と舎ふかあけ守女婦当年孕男と生」我國より児童等が人の



大根注連どうろんしゆんといふものゝ左右さゆうに用ゐる扇あふぎをつけり飛鳥ひどりの状かたちと作り  
 つける壇だんの上うへに席せきをまゝうけり神酒かみきをまゝあけ此町このまちの長ながなるもの  
 礼服れいふくをつけり拜まゐをまゝし所懸昌ところかへしやうの幸福しあふをいひぬる以事よじをまゝもま  
 きよめたる火ひを四隅よすみより移うつり油澤あぶらうみをいひ火ひのうらり易やすきやうり  
 なるなるゆるゆる名端なへ々々熾さかると状かたちあがるあがる  
此火より餅とせきをくらふ病をのぞく  
とらふ世ふあらくありし事あり  
 是則これまづ爆竹はちやく左義長さぎぢやうあり他国たこくあてもある事ことあり或人あるひとの話はなしよ以事よじ  
 百余年ひゃくねん前まへまで江戸えどにもありしが火災くわさいをまゝぐるたれ小村こむら下したて  
 やうりごとく○さして又おんべつおんべつのふ物を作りてその左義長さぎぢやう小醫こいて  
 火ひをうらうせ焼やくを祝事いわいごとと守おんべつおんべつハ御幣ごへいの訛言しごげんありその作つくり  
 やうハ白紙はくしと色いろうらうとを数百ひゃく枚まいつきあをせうらうとを細こまき幣へい束たば  
 のやうふきりまげを扇あふぎの地紙ぢしの形かたちをまゝうらうのまゝとこま  
 数千もろせんあつめて青竹あおたけをうらうりく守まもり大小おほいせう長短ながたハ作る家いえの意いふ

斎神祭事之図



海を去る事うら僅ひ七里ちりあり魚類ぎよるゐ之こからす  
 甚ま篤と小千谷とぢや北越きたえつの一市会いちかい商家けい隣次りんじとと百物ひゃくぶつ備びざるを  
 のの嗣子しゆし廿四五にじゅうご許ゆる号ごうと岩居いんきといふい谷やをよよくくと余よは遇ぐせしと  
 岩淵いんげん氏し親族しんぞくありのの家け小節せうせつををととめめたる事こと十四日じゅうしにち八月はつげつあじ  
 百樹ひゃくじゆ曰いひ余よ京水きやうみづををととくく越後えつごは遊あそびし時とき此こゝ小千谷とぢやの人ひと  
 あり他所よそのありも左義長さぎぢやうありともまづまつつハ小千谷とぢやを盛大せうたいと守まもり  
 焼捨やきすてるを祝いわいと慰なぐさむと現あらる人ひと群ぐんをを形かた寸すんハ勿論もちろん事ことををとりてハ  
 喜酒きしゆの宴えんををひらくひくくととれ  
 國君こくくん盛德せうとくの餘澤よゑ

ありともまづまつつハ小千谷とぢやを盛大せうたいと守まもり  
 焼捨やきすてるを祝いわいと慰なぐさむと現あらる人ひと群ぐんをを形かた寸すんハ勿論もちろん事ことををとりてハ  
 喜酒きしゆの宴えんををひらくひくくととれ  
 國君こくくん盛德せうとくの餘澤よゑ

余塩沢しほざわあり一ハ四十余日其地海うみ遠とほくして夏ハ海魚うみうしよ  
 走はし江戶者江戸者の口くち魚肉うしにくの上うへららり一事四十余日小千谷とぢや  
 あいりりくえいめて生鯛なまだいと喰くせし美味いじあり一事のつての  
 らず又鮭さけの時節しじょうあつ小千谷とぢやの前川せんがわハ海うみ朝あまるの大おほ河が流ながれ  
 ハ今捕とらしをむぐ小庵こあん丁てい味あじをい江戸江戸もまきあり一日鮭さけとてん  
 ぷらら物ものやしてせり余岩居よがんきよむむいこむ六む地ぢあつハ  
 名なを何なにとよぶと問とひふ岩居いんこれハテラとつあり我  
 とつら物ものの名義めいぎ曉さかて古ふる老らはたつねとれどもあつ人  
 きらあつ一先生せんせいの説せつをきこんとつ余答よこたてまら食終しょくしゆうてテラ  
 ラらの来由らいゆうを語かたつ一ハつ鮭さけのてんぷらと飽あちて喰くせり  
 ○てんぷらの説せつ。煉羊羹れんやうかん美みの起原きげん  
 岩居いんよ語かたて日今ひいまをさる事五十余年ごじゅうねん前ぜん天明ていめいの初年しゆねん大阪おさか

雪譜二編卷之中

ち家僕かやく四五人四五人もつふわどの次男つぎなん年廿七八にじゅうはちをり利助りすけとらふ  
 のその身みより一ハのニハの哥妓かぎをつれてせ弁べん弁べん江戶江戸小下  
 り余あが家がの京橋南街第一だいいち街まち對むかひいの裏屋うらやよ住すし一日いちにち事ことの序ついでふありて  
 余あが家がよ来きつより常とこよせ入いして家僕かやくのやうようは使つかむとせ  
 ける小こ花柳はなやなぎよ身みと果はつらものゆゑをわいりつら  
 ちありくよく用もちを弁べんあるゆゑをき人ひとは錢ぜにがなつとて亡な兄あにい  
 ちたつむむいある利助りすけのやう江戶江戸ハ六胡麻むま揚あげの辻つじ  
 賣う多た一大阪おさかをいつけあげつら魚うし肉にくのつけあつらうゆゑこのふ  
 り江戸江戸ありつら魚うしのつけあげと夜よをせふらう人ひとあ一わさしんを  
 うらんとおのつら亡な兄あにい傳でんいそくそんハよきおひつきありあつ  
 うらむいりて俄かたよ調しらべせしふらうおも美味いじあり利助りすけ  
 うらむを夜よをせの辻つじふらうらふその行灯あんどんハ魚うしのつらあげとせり

さんもあやとやらまふりどや〜あやとろ名をつけ〜玉のこころい  
けしバ亡兄志むらく志あんにて筆ととり天麸羅とかきこく  
とせろバ利助不審の見をま〜天麸羅といひろある所謂  
うとの亡兄うちを〜足下ハ今天竺浪人あり〜江戸  
〜き〜て賣創る物もある天ふらあり是ハ麸羅といふ字と下し  
〜るハ麸ハ小麦の粉あて〜る羅ハうまものといふ字あり小麦  
の粉のうすものをとろけ〜る〜夏あり〜戯言云とけしバ利助も  
洒落〜る男もある天竺浪人の〜つきもある天ふら〜り〜と  
大あよろ〜いや〜て女店を〜と〜時あんどん〜と持き〜て字と  
〜い〜ゆる金ぐま〜とき〜時天麸羅と大昏〜て与〜ふ〜てん  
〜ろ〜四銭もて毎夜〜り〜程あり〜と〜一月もた〜る〜ら  
小近辺所〜てん〜らの夜〜せ〜て今ハ天麸羅の名油の〜と〜

雪譜二編卷之中

文溪堂藏

世上ハ傳染〜る〜り以小千谷ま〜てん〜ろ〜の名を〜る〜事一奇  
事と〜〜〜〜〜も京傳翁が名づけ親よ〜て利助が賣〜る〜め  
たり〜い〜る〜碩学鴻儒の大先生も〜る〜る〜る〜ら〜の講  
釈も〜ハ天下ハ我一人あり〜となむ〜と〜け〜ハ岩居も手〜と〜て  
笑ひ〜る〜り〇先年〜てん〜ろ〜の話を友人静廬翁に語り〜ハ  
翁ハ和漢の博達  
時鳴の聞入あり翁曰事物紺珠 明人黄一伝  
作井四卷 夷食の部よ〜てん〜ろ〜  
似〜る名あり〜き〜と〜〜〜〜〜も其唇を借り〜てよ〜〜〜ハ〇塔  
不刺とあり〜て注よ〇葱〇椒〇油〇醬と熬後より鴨或ハ雞〇  
鶯と〜い〜慢火〜て〜養熟〜とあり蟹とあ〜〜〜〜〜る〜見〜る〜  
〇さて天麸羅の播布ハ類せる事あり因〜記す〇播菴漫筆  
享和元年京  
の田仲宣作京師下河原ハ佐野屋加〜と〜り〜の享保  
年中長寄より上京〜て初て大碓十二の食卓と料理〜



弘めたる是京師浪花小食卓料理の初と云ふは名刺娘と云い  
るもの老婆らうばとありて近頃まぐく存命せり則今の佐野屋祖お  
り大坂みくかきとこれ食卓料理ある弘りたれど野堂町の貴  
徳斎とくさいをいへくつづきとある一岩居いひまきとあるまひと  
夜多の友蓉岳ようがく来ア梅をよふ余が酒をこのまのまると聞て家製うせが  
アとて煉羊羹らんがうを恵ぬ味い江戸小同よ余越後よはゆりやうらんを  
賞味して大は感嘆かんたん一岩居いひまき謂曰おゆりやうらんも近年のもの  
あり常のやうらんよとらぶ味いまゆり吾がをまきとある一常  
のやうらんをらぶゆきもの口ふい入らぶり一江戸をまきとある事遠き  
此地このちもや来逢きあひのゆりやうかんあるは実は大平の徳化とくけありとい  
一小蓉岳ようがくも各画とよくし文事ぶんじのありて好事こうじのものあれど  
きとてひびきとまめ菓子ハ吾が家産かさんありゆりやうらんを近來の

雪譜二編卷之中

文溪堂藏

かのとら由來ゆらいと示しめ一玉たまとら余よとらとてのそく。寛政のそく  
江戸日本橋通一町目よと町字まちざを式部小路しきぶこうじといふ所小喜太郎  
とて夫婦ふうふよ丁稚ていぢいとをつづひ菓子屋とい見えぬ菓子造かじぞうは  
かんたんもかきとて喜喜を郎らういせんハ 貴重きこうの御菓子と調進てうしん  
まゝ家の菓子杜氏としあるもの一奉公をわめておふ住し極製の  
菓子とらをせのて茶人又富家のとあまひたりとて以者  
が工風とてちとて煉羊羹らんがうと名づけてゆりけるよ羊羹本字ハ羊肝  
ある事秘苑日録  
喜太郎がゆりやうかんといへるゆりやうかんといへるゆりやうかん  
とも一人一ちとてせのまのゆりやうかんといへるゆりやうかんといへるゆりやうかん  
重箱むかひ空くわとてゆりやうかんといへるゆりやうかんといへるゆりやうかん  
て二三年の間小菓子や二軒とて喜太郎をまのゆりやうかんといへるゆりやうかん  
せのゆりやうかんといへるゆりやうかんといへるゆりやうかんといへるゆりやうかん



雪  
中  
狼  
入  
人  
家  
圖







老狐ありてありて宋人李昉等が太平廣記畜獸の部四百四十二卷狼美  
人ふ化して少羊と通じありて人の母ありて羊七十ありて  
を殺してをけをあらして逃さるり又人の父を喰殺してその父  
を殺して羊を歴する一日その子山ありて来と採る小狼き  
たりて人の如く立其裾を銜するゆゑ斧ありて狼の額と斫狼  
おげ去りゆゑ家ありてふ父の額に傷の痕ありて視て狼  
あることと知りて殺す果して老狼あり親を殺して  
ゆゑ自縣ありて事の由をつげざる事や。廣異記。宣室  
志を引てもせり悍悪の事小狼の字をいふもの。残忍ある  
と豺狼の心といひ。声のおそろしきと狼声といひ。毒の甚  
きを狼毒といひ。事の根と狼。互相ある人と狼顧。  
義无と中山狼。恣に食と狼食。病烈を狼疾といひ。狼

雪譜二編卷之中

世三終

文溪堂藏

籍。狼戾。狼狽。皆彼は譬て是をのちあり文海披沙さの  
獸中最可惡ハ狼あり余竊は以為狼ハ狼中して狼たるを  
とも人ありて狼あるハよく狼をのちすゆゑ狼あるを  
せすもるるふ狼毒をくらる人あり人の狼あるを  
狼の狼あるよりも可恨可惡篤実を外面と奸慾と内  
心とを狼者とといひ嫉と悍戾を狼老婆とといふ巧う子狼心  
をくらすも識者の心眼ハ明鏡ありおろしく堪げら  
んや恥ちざらんや

北越雪譜中卷終